

「文化としての言葉——あなたと私の世界」に向けて

杉山康彦 ●前 共同研究機構委員長

共同研究機構としては各研究グループに共同研究機構の研究発表集会への参加をお願いし、昨年度は六回、今年度は既に一回開催していますが、それとは別に機構委員会主催のシンポジウムを企画しました。このテーマは私が教員の皆さんとのいろいろな場での雑談の中から出たもので、その後委員会その他の教員の方と話し合う中で、このテーマなら学部学科を越え、今までの人間関係を越えた形で、それぞれの専門が接触し、スパークし、和光大学の教員スタッフならではのなにかしかなのものを追求できるのではないかと考えたものです。

このシンポジウムで何を目指すのか、私自身明快ではないのですが、以下いま漠然と私が考えて

いることを申し述べておきたいと思えます。このところ日米経済摩擦ということがいわれ、その基底には文化摩擦があるのではないかと、いうこともいわれます。日本人はつきりものをいわない、日本人はうそつきだ、日本語は論理的でない、そういわれて見るとそうなのかなと思わせられることもあります。ことはコトバということに深くかかわっているということがあると思います。コトバが文化を決定するということもいわれます。そういう観点からこのような問題をコトバを通して考えたいと思えます。

最初教員仲間で、私が学生のことを「ちゃん」づけでは呼ばない、呼べないといいますと呼ぶという人と呼ばないという人があり、私は夫婦間

では自分のことをつい時々「オレ」と呼ぶことがあるが、夫婦げんかときは「ボク」になるなどということまでまた色々な話が出ました。日本語の場合このような人称、呼称が相手との関係、その場によって微妙に変わっています。英語では「I, you, he, she」と常に明快で、この点著しい相違があるようです。フランスの言語学者、E・バンヴエニストにいわせますと「動詞のなかにならぬ方法で人称の区別が示されていない言語は、知られているかぎり、存在しないものと思われる」

（「動詞における人称関係の構造」一九六四 高塚洋太郎訳）ということですが、日本語はバンヴエニストの視野に入っていないようです。日本語は主語である人称代名詞によって述語である動詞が変化しません。この点韓国・朝鮮語も日本語に近いです。

また言語学者柳父章さんにいわせると「私」「君」「あなた」のようなことばでも、日常私たちはできる限り使わないようにしている。西欧文を日本文に翻訳するとき、直訳すると、どうしても日本文としては多すぎる結果になる」（「翻訳とは何か―日本語と翻訳文化―」一九七六・八 法政

大学出版局）ということのようです。こういうところが我々の思考の仕方、文化のあり方に関係があるのででしょうか。

仏文学者であり、哲学者でもある森有正さんは『経験と思考』（初出『思想』一九七〇・一一―七二・一の論文を没後に集めたもの）という本の中で、このような問題に取り組んでいます。そこで森さんは「日本人においては、『汝』に対立するものは『私』ではないということ、対立するものもまた相手にとつての『汝』なのだ」ということを強調します。そして例えば親子の場合、「子は自分の中に存在の根拠をもつ『私』ではなく、当面『汝』である親の『汝』として自分を経験」しているのだとし、すべては「私と汝」でなく「汝と汝」の関係の中に相対するといっています。このような関係を森さんは「二項結合方式」「二項方式」さらに「私的二項方式」と名付けています。

そしてこの二項方式の自他は「互に相手に対して秘密のない関係」という親密性を持っており、あらゆる他人の参与を排除するのだといっています。さらにこの二項方式は垂直性を持っており、身分関係が深くかわっていることも強調します。そ

して森さんは、

「日本語においては、一人称が真に一人称として、独立に発言することが、不可能でないとしても極度に困難である。一人称が真に一人称として発言するということが、「二項」関係の外に立つて発言するということは、換言すれば、他に・とつては、三人称になるということである。」
といい、日本語について極めてペシミスティックです。我々のこのような思考のあり方が、日本語にかかわっているとすればことは重大です。

*

国語学者、佐久間鼎さんの「言語における水準転移（特に日本語における人代名詞の変遷について）」（一九三七）などはこうした問題に目を向けた先達の論文であると思われませんが、言語学者、鈴木孝夫さんはこのような問題に早くから取り組まれた研究者です。それは「ことばと文化」（一九七三・五 岩波新書）に要約されていますが、その最終章は「人を表わすことば」となっています。鈴木さんはここでは、日本語では英語のように人称は明快でなく、「わたし」「おれ」「おまえ」という呼び方が多様であるというだけでなく、お父さ

ん、おじさんといった親族名称、課長、先生といった地位名称、職業名称で呼ぶことも多く、これらは一人称、二人称、三人称と呼ぶより、それぞれ「自称詞」「対象詞」「他称詞」と呼んだ方が日本語に即しているといっておられます。そして森さんのいわれる垂直性について具体的な分析をされ、例えば親族同士の対話については、五つの原則を提示されます。（五）は例えば、弟が兄に対して「兄さん」と呼ぶが、兄が弟を「弟ちゃん」とは呼ばないように、話し手は地位の下の方を相手にするとき、自分を相手の立場から見た親族名称で呼ぶことができるが、逆の場合はそれができない。というように大変明快に論理化されています。またこの「親族名称の虚構的用法」ということで、例えば夫の帰宅の遅いことを「パパ遅いね。どうしたのかしら」などというときの「パパ」は自分の子供を基準とした虚構的な呼び方で、この子供の視点への歩みよりを、共感的同一化と呼んでおられます。そしてこのような親族名称の使い方は日本人のある種の行動様式と対応する点があるともいわれています。鈴木さんは、このような研究がいままでなかったということは、日本の近

代の言語学が師と仰ぎ、模範とした西洋の言語学にはこのような視点が欠けていたからではないかということはいわれていますが、最後は、

「日本語に見られるこの自己視点の対象依存的な構造は、私たち日本人が未知の他人と気安くことばをかわすことを好まないという行動様式と無関係ではないと思われる。」

とし、さらに外国人を相手にするとき、

「相手に同化し、甘えることに馴れている日本人は、つい自己を相手に投射し、相手に依存する。そして相手もまたこちらに同調してくれることを期待してしまう。」

ということ、これは森有正さんの二項方式の論と重なります。鈴木さんも森さん同様大変ベシミステイックな仕儀になります。

最近私は竹内真澄さんという方の「三人称としての社会科学へコミュニケーション的生産力」に立脚した新しい言語形成へ向けて（季刊「窓」一九九二 春号）という文章を読みました。この冒頭の節は「三人称なき今日の精神状況」とあります。ここでは今の大学生の学生たちに「歴史」や

「社会」のことを話題にするのは、ダサイ、つまらない、退屈なことではない」という風潮があり、森有正さんのいう三人称の弱さではないかといっておられます。そしてそれは社会科学にとつて内在的な重大な問題としてとらえておられます。そして竹内さんは今この「三人称」の問題が歴史的転換点を迎えているのではなからうかとされ、

「ここで、ポスト戦後社会の問題状況というのは、日本の〈労働生産力〉の強さが米ソによる世界支配の構図を経済面から突き崩し、東欧、ソ連の崩壊によって世界全体を〈倍加された労働生産力ゲーム〉に巻き込んでいくことから生じる一連の問題状況である。それは、一方で〈労働生産力ゲーム〉に敗退すれば世界の底辺へ蹴落されてしまう可能性と他方では〈労働生産力ゲーム〉に巻き込まれていく限り、環境破壊と南北問題を通じて、結局は人類が生存の危機にみまわれる可能性とを同時対極的に提起し、このジレンマのなかに私たち全体をつなぎ止めるような問題状況である。」

といっておられます。そして竹内さんは森風の三人称を「人格権としての三人称」と呼び、この三

人称が著しく弱いということは、逆に言えば「効率主義」「貨幣」が異常に強いということであり、それを「物権としての三人称」と呼んでおられます。そして日本では、この両者の緊張が極めて弱いことを強調され、このようなジレンマを乗り越えるために、言語的コミュニケーションによる生産力の制御ということへコミュニケーションの生産力」というものを提唱しておられます。

このように考えるとこの「三人称」は、現在の若ものの世代ではいよいよ弱体化、衰退化しているということであり、それは東西の冷戦構造が崩壊した現在の世界構造の問題でもあって、両者は相呼応しているということです。

*

文学研究の分野でも比較的最近、この人称、呼称の問題が文学へのアプローチのひとつの梃子になってきているようです。そこではこの問題は必ずしもペシミスティックに閉じられているのではなく、日本語の内部からそれを越えていくという形で問題にされているように思えます。例えば日本文学の方の若きホープ小森陽一さん―和光大学にも何回か講義をしていただき、今年も「小説

の可能性」という講義をやってもらっています―は「構造としての語り」(一九八八・四 新曜社)などでこのようなアプローチを試みています。ここでは「おそらくこの過程(杉山注、坪内逍遙の小説の方法)には、西欧的小説における、いわゆる「神の視点」に立つ地の文の文体をついに成立させえなかった、日本の『近代小説』の宿命があらわれている」といっていますが、これは森有正さんの「三人称」の問題とかかわることだと思えます。そして『日本語』の文章構造は本質的に二人称的、つまり発語の場を、語り手と聞き手が共に生きていることによって成立するものである」ともいっています。この二人称的ということも森さんの二項方式ということとかかわっていると思えますが、小森さんはこれを必ずしも日本語のマイナス要因のみとしてはとらえず、これを日本の近代小説がどのように越えていったかという文脈で追求が行われているように思えます。

例えば夏目漱石の「坊ちゃん」は「おれ」の一人称小説ですが、これは一方では「おれ」の全き了解者(分身)である下女「清」に向かって語る小説で、その点から見れば二項方式の、「三人

称」、他者のない甘えの関係ということになります。この小説は同時に「坊ちゃん」を「なぜそんなに無闇をしたか」と問い詰める潜在的聞き手、へ常識ある他者」をも内包しており、この両者が葛藤するというような趣旨を論じています。つまりこの小説の背後に「三人称」が出現するという風にとってもいいと思います。

また最近、亀井秀雄さんの「坊ちゃん」―「おれ」の位置・「おれ」への欲望（国文学解釈と教材の研究 一九九二・五）という論文が発表されました。これはまず「なぜかれは自分を呼ぶのに「おれ」という代名詞を選んだのか」と書き始められますが、この小説は四国から帰郷し、「清」が亡くなった後に書かれたという形の小説です。それで亀井さんは「おれ」は少年時代父親からは「貴様」呼ばわりされ、「清」からは「あなた」と敬称で呼ばれていた段階では「おれ」とは自称しなかったのではないかといひ、父親が死んで一家離散して下宿する段階で「清」が「あなた」をやめて「坊ちゃん」と呼び、それに対応して、「おれ」と自称するようになったのだろうと推定します。「坊ちゃん」と「おれ」は対なのです。そして

「おれ」は、清が誉めてくれる意味で「坊ちゃん」たる自分を自認し、つまり「坊ちゃん」たることを引き受けてゆくわけであるが、そのためには自分を誉めてくれる清自身の「心の綺麗さ」の発見が必要だった。」

とありますが、「おれ」という自称はこのようなアイデンティファイとしての意味を持つということです。清が死ぬと「清」にとつての「坊ちゃん」も死にます。つまり「おれ」のアイデンティティも失われるのですが、亀井さんはこの小説はこのアイデンティティを守るために語られた「おれ」への欲望であるといわれます。そうすると、これは私の付言ですが、読者はこの小説の末尾のところ「おれ」と「坊ちゃん」の二項方式の甘えから放り出されます。そこには孤独な一人称―三人称がこいまみられるということになると思います。

野口武彦さんは「批評空間」という季刊誌（一九九二・六No5）で「三人称の発見まで」という評論の連載を始めています。この文章は

江戸時代は、三人称を知らなかった。

日本文学が「人称」の問題とぶつかったのは、明治二〇年（一八八七）前後に成し遂げた言文一致という出来事のうちにであった。

と書き始められます。そして「文学史上の『近代』は、或る基本的な視覚から眺めるならば、三人称の発見だったのである。」といえます。そしてその道筋を近世浄瑠璃から探ろうというものです。

また同じく最近のものでいいますと申寅シジツツさんさんに「呼びかける『私』、呼びかけられる『君』——生まれ出づる悩み」論——（季刊『文学』一九九二・四No.2）というのがあります。このようにこのころ日本文学研究ではこの人称、呼称の問題が、語りの問題として一つの焦点になっていると思われれます。

また芥川賞受賞作家、松村栄子（一九六一生まれ）に「僕はかぐや姫」（一九九一・五）という小説があります。伝統ある女子高の文芸部の生徒たちを中心とした物語。

「裕生にはいくつかの呼び名がある。千田さん、千田先輩、ヒロ、裕生、物覚えの悪い先生はセンダと呼び、そして佳奈は裕生をフルネー

ムで呼ぶ。裕生も彼女をフルネームで呼ぶ。

尚子のことは「尚シヨウ」と呼ぶ。（中略）尚子のペンネームは「辻倉尚」だった。裕生も尚子も自分のことを「僕」と呼んでいた。

原田もそうだった。それが自然だった。

彼（女）らは不良でもなかったし、男になりたかったわけでもない。

女らしくするのが嫌だった。優等生らしくするのが嫌だった。人間らしくするのも嫌だった。どれも自分を間違って塗りつぶす、そう感じたのはいつ頃だったろう。器用にこなしていたへらしさのすべてが疎ましくなって、すべてを濾過するように「僕」になり、そうしたらひどく解放された気がした。女子高に来ると他にも「僕」たちはいっぱいいて、裕生はのびのびと「僕」であることができた。

要するに否定と拒絶からなる「僕」は、のびやかに透明だったけれど、虚ろに弱々しくもあった。」

この千田裕生は、クラブの合宿のある事を境にして「わたし」と呼ぶようになります。そのおごりかな移行は私を泣かせます。女の性、その宿命

を哀れむというわけではありません。女でも男でも少年から大人へどのように越えて行くのか、それは古今を問わず重い問題だと思います。源氏物語のあの顔を「赤くすりなし」、髪を「けづることをうるさが」る若紫はいかにして大人となるか、「坊ちゃん」は純粹を捨てどのような大人になるのか、「三四郎」然り、大江健三郎の「芽むしり仔撃ち」の少年の「僕」も小説の末尾で自ら選んで大人の世界へ放り出されます。どの物語も俗なる大人を拒絶し、かつ少年と離別します。「僕はかぐや姫」はその現代版だと思えます。この小説では

人称、呼称というものが、主人公にも意識され、顕在化していますが、やはりそこには二項方式でない一人称—三人称の「僕」へわたし」が誕生していると思えます。

英文学者、栗原裕さんの著書「文芸のことば」

(一九九一・一 沖積社)には「人称論」という章があります。例えば、

(イ)人の言うことはよく聞くものだ。

(ロ)人の言うことは聞きたくないね。

の人称を問題にします。そして英語の場合でも人称の I, you, he というように単純ではないことを

論証しようとしているように思えます。

またジャーナリストで作家でもある玉木明さんは「言語としてのニュー・ジャーナリズム」(一九九二・二 学芸書林)の中に「武器としての「三人称」ウオーターゲート事件とニュージャーナリズム」という章があります。これはカール・バーンスタインとボブ・ウッドワードという二人の著者の「最後の日々」を論じたものですが、玉木さんはこの前著「大統領の陰謀」が、すべて「当事者の視点」で語られていたのに対し、この本はその「視点」では語りえなかったことを語っているといっておられます。

二人の著者は、その情報は「記録に載る」が、「情報提供者の身分は伏せる」というルールは守る。しかし例えばキッシンジャー国務長官室の内部を再現した部分があります。極めてリアルな表現ですが、ここからは情報提供者は誰と限定できません。そして結局この文章の構文は「キッシンジャーは……」と□□が私(バーンスタインまたはウッドワード)に語った」ということを隠し持っていると玉木さんはいいます。□□がそれです。なぜそうなるか、それぞれが「三人称」の構文だ

からです。

「三人称」においては、その構文に含まれる内容が「語り手＝私」を経由することなく、直接その構文の「主語＝二人称」へと結合される。

二人はこの「三人称」に依拠しなければ、けつしてホワイトハウスの内部を描くことはできなかつた、ここでは「三人称」は武器だということです。これも英語の場合の話です。

色々な話を持ち出して恐縮ですが、問題はますます漠然としてとらえどころがありません。こういう状況の中でこのシンポジウムは何を問うるか、私自身はつきりしませんが、これを皆さんの、そして聴衆との話合いの中でいくばくかのことをあきらかにして行きたいと思うのです。

鈴木勤介さんには、本学学生諸君の協力を得るはずの「アンケート調査」をもとに、いまの若者の現状を報告していただく予定です。ヨーロッパの人称、呼称の特質はやはりキリスト教とかかわ

りがあると思います。「神の視点」ということも書きました。神との問答ということもあると思います。そういう視点とかかわるかと思いますが、水澤峻さんにはヨーロッパの図像についてこのような問題を論じていただけるかと思えます。松山幹秀さんは英語の立場から、劉孝鐘さんは韓国・朝鮮語の立場から、塩崎文雄さんには文学の立場からお話しがあるはず。そして大学のキャンパスではなく、社会へ出た大人たち、企業ではこういう問題は現状としてどうなっているのか、そういうことをジェンダーの問題をも含めて影山裕子さんに、その体験を通じてお話しいただきたいと思っています。

以上が私個人の当面考えられることです。どうかその枠を越えてお話ししていただき、話合いを展開していただきたいと思います。

一九九二年五月